

## 国 語 (B方式)

### 注 意

1. 問題は全部で8ページである。
2. 解答用紙は(その1)(その2)がある。(その1)はマーク・シートになっている。
3. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。(ただし、マーク・シートにはあらかじめ受験番号がプリントされている。)
4. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
6. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

### マーク・シート記入上の注意

1. HBの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の○を塗りつぶしなさい。○で囲んだり×をつけたりしてはいけない。

解答記入例(解答が1のとき)

1	●	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

4. 一度記入したマークを消す場合は、消しゴムでよく消すこと。×をつけても消したことになる。
5. 解答用紙をよごしたり、折り曲げたりしないこと。

次の文章は、「あはれについて」と題された論の一部で、平安時代における人々の自然感情の特異性について論じている。これを読んで後の問に答えよ。

元来この時代の貴族的生活の間に育成された自然感情は、教養による過去からの種々の文化的伝統(殊に和歌や漢詩の如き文学からの影響)、又種々の思想的影響(殊に仏教思想)によつて、既にその大体の性格を規定されていたことは勿論であるが、しかもまたそれは、この時代特有の人間の生活内容と密接の関係を有し、そこからその特色を規定されているところも、少くないように思われる。まずその外部的な形式から言えば、当時の貴族の生活は、多少の例外の場合はあつたにしても、大体に於いて極めて静的、安定的で、且その生活の範囲も、京師を中心として、その周囲の比較的狭い地域に限られていたであろう。勿論古くは土佐日記や伊勢物語の著者の如き場合もあり、又後になると多くの紀行文学に盛られているような、比較的広い或は遠い地方に互る、自然感情の多様性も見られ、更にまた当時としても、和歌には特に羈旅きりよの部類があり、そのいわゆる歌枕うたまくらも頗る広汎な地域に互つていと言える。しかしながら当時の多くの貴族の、現実的体験としての自然感情発展の地盤は、何と言つても大体京洛の山河に限られ、しかも主としては朝夕彼等が起居した宮廷や、自己の邸宅べつしよないし別墅の庭園の風景が、その対象であつたことと想像される。

次にまたその生活の内容から言えば、その比較的頻繁なる冠婚葬祭は、おのずからいわゆる神祇、釈教、恋、無常と云う如き觀念を、彼等の自然感情の中に織り込んで行く機会を作つたであろう。例えば京師附近の寺参り、社詣で、及び季節々々の祭儀、鳥辺山その他に於ける野辺の送り、それから又源氏物語などに常に描かれているような、男女の恋愛生活と緊密に織り交ぜられた自然美の観照等がそれである。ところで私の考えによると、そこにかくの如き生活の事情から、当時の自然感情の上に当然もたらされたであろうと思われる一つの結果、——また若し仮りにそう云う特殊の条件がなかつたとしても、一般に我が国の如き特殊の風土に於ける、自然感情それ自身の自然的發達の方向としても考えらるべき一つの結果がある。それは即ち自然に対する人間の美的感受性が、単に花鳥の色彩や山水の形態の如き、外面的感性的靜的な方向に限られず、寧ろ自然の時間的推移に

よる、極めて微妙な変化そのものに対する一種の感覚を鋭敏ならしめ、而して言わばこの自然に於ける「時間」の感覚が、又おのずから自然感情を或る意味に於いて内面化し、精神化する傾向を生じたことである。花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものか  
はと言った、徒然草の作者のような、多少仏徒的皮肉味を帯びた、意識的の自然美論はなお後世のものであるとしても、源氏物  
語の自然感情が如何に鋭い、如何に微妙な季節感情を示しているかは、今更喋々するまでもないと思う。

この自然に対する特殊な感覚の発達は、必然的に自然に対する静観的態度の深さを伴い、かくて当時の自然感情は、単なる自然  
享樂又は自然翫賞の域から、更に一種<sup>2</sup>の形而上学的ないし神秘主義的静観の契機を含んだ、深い自然体験にまで展開せんとす  
る傾向を持つていたと考えられるのである。即ち平安朝人の場合に於いては、私の考えによると、美的文化に比して甚だしく  
A 文化が立ち遅れ、殊に哲学的思索の方面に於いて、その知性は弱点をもつていたと考えられるからして、彼等は概し  
て生活上の事件そのものに対する内面的反省、即ち人生や世界の問題に思いを潜めることによつて、懷疑的に「存在」の虚無性に  
想到すると云うよりも、むしろ直接に彼等の生活気分の奥底に巢喰つた漠然たる哀愁が、常に自然現象に投影され、殊に絶えず  
流転して止まない自然の変化が、彼等の眼に鮮かに人生の無常を反映して見せることによつて——即ち一言にいえば、哲学  
的思索や冥想よりも、むしろ主として B の方面から、一種の悲観主義的心構えに誘導されたのであろう。今私はこの  
点をもう少し立ち入つて、次に考察して見ようと思う。

彼等を取り巻いた周囲の自然は、春の花につけ、秋の月につけて、實際限りなく美しいものであつた。而してその美は、自然  
の無限の大きさや威力を露わに示す、圧倒的な、雄大崇高なものであるよりも、寧ろ静穩な円満な調和的な、大和絵的の優美性  
を基調とするものであつた。即ち一言にしていうなら、それは近代の風景の美ではなく、何処までも古典的な自然美に外ならな  
かつたのである。又更に言い換えるならば、そこには比較的素直な、純粹な「美」の姿が見られたとも言えるであらう。それで  
あるから、たとい「美」そのものの C としての「果敢なさ」、「脆さ」と云うようなものの、明確な理論的反省は無かつた  
としても、斯様な種類の美を朝夕彼等に開示した自然を、特にその時間的推移、その流動性の角度から、好んで眺めた彼等の意  
識にとつては、 D としての美の果敢なさは、やがてまた美的対象としての自然そのものの果敢なさと、一つに融け

合つて感受されたに相違ないのであるが、それと同時に一方ではまた、かかる自然の流動性が、彼等の生活気分そのものの投影により、感情移入によつて、結局 **E** そのものの果敢なき、脆さの象徴としても眺められたのである。この意味に於いて、彼等の体験の中に於ける自然美は、確かに美的直観と世界観的心構えとを暗々裡に結び付ける一つの **F** であつたと言つてよいと思う。源氏物語の中には、この種の体験が到る処に巧みに表現されている。今その一例を挙げるならば、御法の巻に描かれた紫の上の死は、この女性を熱愛した源氏自身の心に対してのみならず、これを読む吾々の心にとつても、<sup>3</sup> 恰も「美」の脆弱性が人間の形に於いて象徴されているかのように思われるのである。『こよなう瘦せ細り給へれど、かくてこそあてにな<sup>4</sup>まめかしき事の限りなきも勝りてめでたかりけれと、来し方あまり匂ひ多く、あざあざとゐませし盛りは、なかなかこの世の花の薫にもよそへられ給ひしを、限りもなくらうたげに、をかしげなる御様にて、いとかりそめに世を思ひ給へる気色、似るものなく心苦しく、すずろに物かなし。風凄しく吹き出でたる夕暮に、前栽見給ふとて脇息に倚り給へるを……』そこに源氏が見舞に来て、紫の上が起きているさまを見て、今日は気分がよいのだからと言つて喜ぶ。その時に紫の上が歌を詠む。

ア おくと見るほどぞはかなきともすれば

かぜにみだる萩のうは露

それに対して、源氏も返歌を詠みながら泣く。

イ ややもせば消えをあらそふ露の世に

後れ先だつほどへずもがな

その場に居た明石の上の姫宮もこれに対して、

ウ 秋風にしばしとまらぬ露の世を

たれか草葉の上とのみ見む

と詠んだ。その夜の明け方に紫の上は世を去るのである。

さて私は既に前に当時の自然感情が、言わば自然の時間性<sup>5</sup>に対して非常に敏感であつたことを論じたが、しかしなお細かに言

うと、自然現象の時間的変化も、若しそれが単に無秩序、或は非合理性の観点からのみ捉えられたならば、それは単に興味の対象となり、若しくは美的感興を補助する手段とはなり得ても、吾々の主題たる「あはれ」の美的感情とは、大して関係のないものとなってしまうであろう。西洋には Memento mori と云う言葉がある。たとえば古い絵画などに、青春の人間を描いて、その背後に死神の姿を仄めかしたり、又は人生の無常を暗示する意味に於いて、砂時計のようなものを描き添えたりしたものがあるが、これ等は即ち宗教的意味に於ける Memento mori の手段なのである。ところで私は平安朝の貴族の内面生活にとつて、自然のめまぐるしき変化の相、いわゆる飛花落葉の果敢なさは、常に一種の Memento mori の如き意味を持っていたのではなからうかと考えるのであるが、しかしその多様な変化の中にも、自ら一種の秩序があり、法則性があつて、そして秩序や法則の恒常性と、これに統一される無限の変化との緊張関係が、適当に吾々の心に感受される時、——換言すれば自然の律動的、周期的な推移や変化が、その美的体験と共に深く意識せしめられる時、そこに初めて人生の無常を反映し、象徴するものとしての、自然そのものの Memento mori の機能が、心理的に強く發揮されるのであらうと思つた。

それ故にまた反対に、若しも自然の姿がそのあらゆる意味に於いての、恒常性不変性の観点のみから把握されるならば、そこにも切実な直接体験としての人生の無常感が刺激されることは、比較的少いものではなからうかと私は考える。勿論この場合にも、瞑想的理智的の意識にとつては、例えば年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからずと云つたように、或は又国破山河在と云つたように、自然の恒久性と人間界の無常性とを強く対照させることによつて、無限の哀愁感のそそられることはあるけれども、しかしそれは概して、先ず思惟を通じて普遍的な人生の無常と云う真実が把握され、そこから哀感の生ずる場合であつて、吾々がここで論じているような、直接的の無常感の体験とは別のものである。Memento mori の直接の効果は、私の考えでは自然の律動的ないし周期的の変化が、言わば驕れる人間の前に、神の手によつて置かれた、一つの大きな砂時計の如き意味を以て、人生を貫く「時」の流れそのものを、痛切に感知せしめ、或は反省せしめるところにあると思ふ。

それからまた第二には、この様な感情的効果が、自然の律動的变化のテンポ、もしくはその周期の長さにも、心理学的に依存する事実を、吾々は見逃がすことが出来ない。例えば吾々の日常の實際生活を律するところの、日の出日の入りから、又次の日

の出までの一日或は一昼夜の周期は、この点に於いて余りに短く、余りに急調であるために、この直接の感情効果を喚び起こすに適しないであろう。勿論この場合にもまた吾々の思想上では、たとえば蜉蝣かげろうの旦夕の命も、人間の寿命もその果敢なさに変りがないと言われ、又人生朝露の如しとも言われるが、しかし実際の痛切な体験としては、瀕死の病人でもない限り、吾々は一日一昼夜毎に吾々の命が削られて行くことを、そう直接に感ずるものはないであろう。又これと反対に、若しそのテンポないし周期が余りに長過ぎて、例えば十年二十年或はそれ以上ともなれば、人生の転変は素より、時にはいわゆる滄桑そうそうの変をも意識せしめられて、世界全体の流転性が、あからさまに客観的事実として、認識されるには甚だ都合が好いけれども、吾々の直接の無常感Gは、そんなに遲鈍であり、呑気であることは出来ないのが普通である。

斯様に考えて来ると、心理的に自然の風物の変化が、先きに述べたような *Memento mori* としての感情的効果を与えるのに、最も都合のよいテンポは、やはり四季の推移循環と云うことであろうと思われる。吾々は一年の周期を以て繰り返される季節の感じと云うものによって、最も切実に人生に於ける「時」の流れを意識せしめられ、「年齢」と云うものによって、最も鮮かに律せられている、人間の成長老衰の現象を強く反省せしめられる事実を否定することが出来ない。

(大西克礼「あはれについて」)

〔注〕

\* 京師みやこのこと。

\* 別墅別荘のこと。

\* 喋々多弁なこと。

\* 滄桑滄海変じて桑田となるという意味で、世の中の激しい変化のこと。

問一 傍線部1「自然の時間的推移」とは具体的にどういふことを示すか、二字熟語で抜き出せ。解答用紙(その2)を使用。

問二 傍線部2「一種の形而上学的ないし神秘主義的静観の契機を含んだ、深い自然体験にまで展開せんとする傾向」とあるが、本文中に、これと同じ内容をより簡潔に述べている表現がある。二十字以上二十五字以内で抜き出せ。(句読点を含む)。  
解答用紙(その2)を使用。

問三 空欄 A に入る語句として最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1。

- ① 外面的
- ② 内面的
- ③ 知的
- ④ 詩的
- ⑤ 静的

問四 空欄 B に入る語句として最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2。

- ① 自然美の虚無性に対する内面的感知
- ② 外界の自然に対する美的直観
- ③ 仏教色を帯びた意識的な自然美論
- ④ 近代的風景に対する理論的反省
- ⑤ 朝夕の自然翫賞における享樂的態度

問五 空欄 C、D、E に入る語句の組み合わせとして最適なもの、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3。

- ① C…現象学的本質 D…体験 E…人間的存在
- ② C…体験 D…体験 E…人間的存在
- ③ C…現象学的本質 D…体験 E…現象学的本質
- ④ C…現象学的本質 D…人間的存在 E…現象学的本質
- ⑤ C…体験 D…人間的存在 E…現象学的本質

問六 空欄 F に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4。

- ① 契機                      ② 秘鍵                      ③ 接点                      ④ 媒介                      ⑤ 紐帯

問七 傍線部3「恰も「美」の脆弱性が人間の形に於いて象徴されているかのように思われるのである」とは、どういうことか。ア

・イ・ウの『源氏物語』の三首に即して、二十五字以内で説明せよ。解答用紙(その2)を使用。

問八 傍線部4「あてに」の意味として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5。

- ① かわいらしく              ② 風情があつて              ③ 気品があつて              ④ 可憐で                      ⑤ 格別で

問九 傍線部5「自然の時間性」について、筆者は「あはれ」を考える上でどういう観点から捉えるべきと考えているか。最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6。

- ① 自然現象を、時間的変化の無秩序性・非合理性の観点から捉えるべきと考えている。  
② 自然現象を、時間的変化の律動性・周期性の観点から捉えるべきと考えている。  
③ 自然現象を、その恒常性・不変性の観点のみから把握するべきと考えている。  
④ 自然現象を、人間界の無常性と強く対照させる観点から捉えるべきと考えている。  
⑤ 自然現象を、多様な変化における無限性の観点から捉えるべきと考えている。

問十 傍線部6「Memento mori」とはどういうことか。本文の内容から推測して、最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7。

- ① 自然の恒久性              ② 時の永続性                      ③ 無限の変化                      ④ 時の無常性                      ⑤ 世界の流転性

問十一 傍線部7「国破山河在」はある漢詩の一句である。その漢詩の作者として正しいものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8。

- ① 王維                      ② 李白                      ③ 孟浩然                      ④ 李賀                      ⑤ 杜甫



問十二

空欄

G

に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **9**。

① 理的

② 瞑想的

③ 主観的

④ 感情的

⑤ 律動的

問十三 この文章の趣旨として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は **10**。

① 平安朝の人々は、懐疑的に人生を思索することで、流転する自然現象に無常を感じ取った。

② 季節の変化に対する鋭敏な感覚が、活動の範囲が限られていた平安朝の人々の無常感を刺激した。

③ 頻繁な冠婚葬祭が、平安朝の人々の自然感情に与えた影響は無視することができない。

④ 人間の成長老衰の現象を強く認識させるのは、十年二十年あるいはそれ以上といった歲月である。

⑤ 人間が抗えない圧倒的な自然の威力が、平安朝の人々の無常感を育成した。





